

SRID 活動報告

SRID サロン

山下道子
SRID 事務局長

「サロン」活動の始まりと展開

2008年に私がSRIDに入会した時にはすでに「サロン」は長い歴史を持っていた。設立当初から、SRIDは会員同士の親睦を深めるための「サロン」である、との認識があった。当時、サロンは一部の会員が所属する「会員制クラブ」を利用して開催されていた。とりわけ海外会員が帰国する折には、「〇〇クラブ」と称される場所に集まり、最新の海外情報をつまみに、ビールやお酒を飲みつつ自由討論を楽しんだ。つまり、SRIDは国際開発に携わる同好の士が懇親の場で親交を深め、情報交換を目的に発足したもので、自由闊達に語りあえるサロン活動がSRIDの原点であったといえる。

故三上良悌(ヨシタ)氏が第3代SRID会長を務めた1983～1990年になると、自宅を開放して「一木会」という懇談の場を会員に提供し、俗称「サロンド・ミカミ」が定着した。当時は「SRID 婦人クラブ」の三上夫人が手料理を振る舞い、丁々発止の政治談議で盛り上がったと聞いている。



サロンド・ミカミの風景 (2014年11月)

サロンド・ミカミの最終回は三上氏が93歳で死去される半年前の2018年10月に、三上氏が入居していたケアハウスで開かれた。死の直前まで新聞記事を丹念に読み、時事情報の収集・発信を怠らなかった三上氏の知識欲には驚くばかりである。サロンに参加した黒田会員によれば、この日も米中の覇権闘争や英国のEU離脱等について、議論が延々と続いたそうである。

「サロンド・ミカミ」と併行して、第9代会長(2015～2018年)の藤村建夫会員が2010年に自宅で「サロン・エカポール」を開設した。このサロンの主旨は、外部から国際開発の最前線で活躍している専門家を招き、開発のホットイシューについて話を聞くことであった。サロンでは藤村ホスト秘蔵のワインが提供されたほか、ホスト自ら腕を振った料理が食卓にのりきれないほど並んだ。主婦である私(山下)は顔色を失い、専ら皿洗いを担当することにした。



サロン・エカポールの風景 (2016年7月)

サロン・エカポールはコロナの感染が拡大する2020年以降、活動を停止したため、2021年2月にZoomによる「SRIDサロン」を開設することになった。藤村担当幹事の提案で、話題を写真、絵画、旅行、スポーツ、最新のトピックなど、会員が持つ趣味と教

養を紹介して、巣ごもり会員を楽しませる「会員広場」の企画とした。今後、コロナ感染症が終息すれば対面式のサロンを復活させ、活動に関連する若者との合同サロンも検討したい、としている。以下に第1回から第8回まで開かれた「SRID サロン」の概要を紹介する。

第1回 SRID サロン「写真展」中沢賢治会員

2021年2月6日に小林代表幹事をホストとして、中沢賢治会員のオンライン写真展を開催した。多数のフォトコンテストで入賞実績のある中沢会員は、2015年に欧州復興開発銀行（EBRD）を退職してロンドンから帰国して以来、地元の写真教室等で研鑽を重ね、現在では雑誌に写真が掲載されるなどプロフェッショナルな活動をしている。サロンでは入賞作品の中から39枚が展示され、撮影者の解説つきで鑑賞するという、贅沢で楽しい時間を過ごした。終了後に参加者16名による写真の人気投票を実施した結果、下の写真が1位となった。

わが心の倫敦 2020年 総合写真展

優秀賞・神奈川新聞社賞受賞、東京都美術館で展示



ロンドン西方のヒースロー空港に向かう途中のチズイックは、緑の公園があちこちにあった。この頃にはタシケント勤務以来、わが家のメンバーとなっていた2匹の愛犬がいたので、夕方や休日の散歩で公園やテムズ河畔への散歩を楽しんだ。この写真は赤いマロニエの花が緑の中に浮かぶ5月のチズイックハウス庭園の様子である。

中沢会員は写真について次のようにコメントしている。現在はデジタル技術の革新により伝統的な障壁は低くなり「誰もがカメラマン」の時代である。カメラマンの裾野が広がったことにより競争は激化し、テーマ性、芸術性をどのように高めるかが問われる時代になった。新しいチャレンジとして最新のパソコンとプリンターを使いこなすことが求められている。スマホのカメラ機能が進化し続けている点を考えると、写真の持つ意味合いはさらに変わっていくだろう。

第2回 SRID サロン「パタゴニア・トレッキング紀行」鈴木博明会員

2021年4月3日に山下がホステスを務め、鈴木博明会員による「パタゴニア・トレッキング紀行」の報告会を開催した。報告会に先立ち、5歳からピアノを始めた加藤珠比会員が自宅のピアノで生演奏を行い、ショパンの「エチュード Op 10 の4・嬰ハ短調」という難曲を見事なテクニックで披露した。加藤会員は「テクニックが強調された表情豊かな曲であるが、私には情緒面まで表現するほどの余裕はなかった」と謙遜している。以下は鈴木会員のトレッキング報告である。

パタゴニアは太平洋、大西洋、マゼラン海峡に囲まれた南アメリカの最南端の地域で、チリとアルゼンチンに位置している。壮大な氷河の残るアンデス山脈、フィヨルド、ステップからなる太古の自然が残る世界の秘境である。パタゴニア観光の基地である Puerto Natales までサンチャゴから国内便で 2 時間半。同地で一泊後、バスで 3 時間かけて Torres del Paine (Blue Tower) 国立公園に到着。出発点の Las Torres から氷河や山を一周する全長 130km の O Circuit を歩き、7カ所の宿泊地（テント 2 日、小屋 5 日）を廻る。毎日 11km から 22km 歩く。一日の高低差は 250m～800m 位。



Dickson Lake からアルゼンチン側の氷河を臨む Paine Grande 小屋から Paine Grande Hill を見上げる

トレッキングは準備段階から楽しめる。開発プロジェクトをデザインする様に情報を集め、どの山に、いつ頃、誰とどのように行くかを決める。登山ウェア、道具、行動食を揃え、現地のロジの手配をすると、遠足前の小学生のように胸がワクワクしてくる。いよいよトレールを歩き出す。スマートフォンも使えない、自分の体だけが頼りのフィールドで、木や花に囲まれ、野や森を横切り、溪流を渡渉し、岩山を乗り越えていくと、都会生活ですっかり忘れていた本能的な感覚が蘇ってくるようだ。世界中から来たトレkker達との出会いもあり、一週間歩き続けると体も心もすっかりデトックスされる。

第 4 回 SRID サロン「ジャズピアノの楽しみ」湊直信会員¹

2021 年 8 月 14 日に山下がホステスを務め、ジャズピアニストの湊直信会員の解説付きで、お仲間のベーシスト、ドラマーとのライブで共演・収録された 6 曲のジャズを楽しんだ。湊会員は小学生時代にバイエル教本でピアノを習った後、大学時代にジャズが好きになり、自己流でジャズを弾いていた。当初はコード（和音）についての知識がなかったが、それが解ると伴奏をつけて弾けるようになった。2005 年にジャズピアノを習い始め、仲間とジャズの音楽活動を始めた。これまで日比谷野外小音楽堂で 3 回演奏したほか、2010 年にアマチュアのジャズオーケストラに入団して以降、コロナ前の 2019 年まで毎月 1 回程度の演奏機会があった。

クラシック音楽と比較すると、演奏の目的は楽譜を再現することではなく、楽譜に基づいて曲を表現することである。ジャズの楽譜はメロディとコードで構成されており、演

¹ 第 3 回 SRID サロンはスピーカーの希望により非掲載



写真は仲間との練習風景

奏者が自由に演奏できる範囲が広い。ジャズの演奏とはクラシックでいう演奏と編曲を同時に行っているのかも知れない。従って、ジャズには「間違い」という概念がなく、クラシック音楽のように弾き間違いを指摘されることは少ない。一定の強さでピアノを弾くのではなく、強弱強弱と演奏して、リズム感を出す。加えて、ジャズには多くの場合に

Improvisation（即興演奏）があることが特徴である。

ジャズピアニストのチック・コリアによると、Improvisation はルール（メロディー）と全くの自由の間にある。Improvisation によって同じ人が同じ曲を弾いても、その場の雰囲気、気分、共演者や聴衆からの刺激によって、全く違う様に弾けるのである。演奏者がチャレンジを見せる演奏はスリリングであり、それ自体を楽しむことができる。私（湊）は演奏の途中で長い Improvisation にチャレンジしたことがあったが、その時は途中からどうしても即興で弾くメロディが頭に浮かばず、まるで水泳が下手なくせに沖に出てしまったような気分を味わった。これも楽しい思い出である。

第5回 SRID サロン「世界釣り紀行」和気邦夫会員

2021年9月25日に藤村幹事がホストを務め、和気邦夫会員による「冒険とロマンを求めて：フライフィッシングの旅」を開催した。開始に当たり第2回サロンと同様、加藤珠比会員のピアノ演奏「エリーゼのために」を楽しんだ。和気会員は国連人口基金（UNFPA）事務局次長を務めたが、退官後の趣味として55歳の時に Fly-fishing School で2日半の研修を受け、フライフィッシング（毛バリ釣り）の基礎を学んだ。すでに20年以上のキャリアを持ち、毎年1~2回、主としてカナダとニュージーランドに釣り旅行に出かけている。その間、アイルランドやカリブ海等での海釣りにもチャレンジしている。



カナダではヴァンクーバーから内地に入り、Pitt River 上流にある Pitt 湖畔のロッジに1週間宿泊して釣りを楽しんだ。魚種は紅サケ、Steelhead、ピンクサモン、銀サケ、ガリエツ、カラフトマス、銀サモン、キングサモンなどで、大きなものは1m近くある。Steelhead が釣れた時は大変な格闘だった。原則として Catch and Release で釣った魚は川に逃がすことになっている。ガイドを雇って彼の助言で釣る場所を移動する。熊が出ることもあるのでガイドはフィンランド犬を連れている。万が一熊に出く

わしたときは、この犬が吠えてクマを追い払う。

ニュージーランドではオークランドから小型飛行機でタウポ湖に向かい、ここに3週間滞在した。ガイドがフライを提供してくれたが、あいにくの早魃で川の水量が少なく、大きな魚は釣れなかった。翌年はオークランドから飛行機で Nelson に飛んで Stonefly Lodge に滞在し、大きなブラウントラウトをたくさん釣った。たまたま私（和気）が釣りに行った時に、「ニュージーランドに行った日本人の釣り客がプロパンガスの事故で死亡した」というニュースが日本に伝えられ、大騒ぎになったことがある。

第6回 SRID サロン「小島途上諸国を巡って」森田宏子会員

2021年10月23日に藤村幹事がホストを務め、35年間にわたり国連で勤務した森田宏子会員が「持続可能な開発会議」の企画運営と小島嶼国(Small Islands Developing States: SIDS)での経験を紹介した。国連が支援している SIDS は3つの海洋地域（南太平洋、カリブ海、AIS: Atlantic, Indian and South China Sea）に属している38の独立国からなる。それぞれに固有の地形と文化を持っており、多様であると同時に共通性もある。サロン開催中は森田会員の CD により、島々の多彩な音楽を BGM として聴くことができた。

インド洋にはモルジブ、セイシェルズ、モーリシャスなど、いずれも観光地として有名な美しい島々がある。モルジブでは海面上昇のため、飛行場から首都まで舟に乗らなければならなかった。ハネムーン旅行者にとっては天国のような環境であるが、リサイクルのシステムを作る資金も需要もないため、ごみ処理が大きな問題になっている。



セイシェルズの港

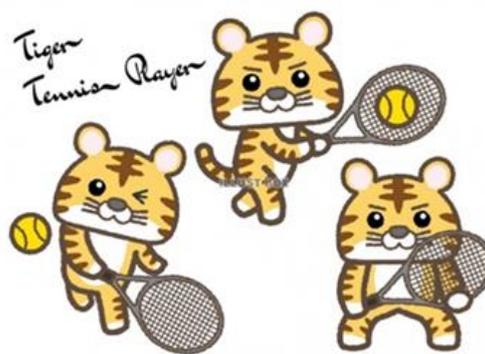
セイシェルズは教育に力を入れている。大学を設立して自国内で高等教育を受ける体制を整え、優秀な人材を国に留めようとしている。

カリブ海にあるハイチは自然災害にしばしば見舞われ、政治の不安定な最貧国である。先日も大統領が暗殺された。貧富の格差も大きい。大地震からの復興が殆ど進んでおらず、ごみの山が悪臭を放っている。任期中にスラムの住民に資金を与えて家を建てるプロジェクトを推進したが、今ではどうなっていることか。ジャマイカはボルトなど陸上選手やレゲエ音楽で有名だが、首都などは特に治安が悪い。University of West Indies の拠点キャンパスがあり、卒業生には著名な政治家、学者、外交官等がいる。

第7回 SRID サロン「新春テニス放談会」鈴木博明会員(司会) 玉置佳一会員 不破吉太郎会員 松田教男会員 山岡和純会員

2022年2月5日に鈴木博明会員の司会により「新春テニス放談会」を開催した。テニスが三度の飯より好きな玉置佳一、松田教男、山岡和純、不破吉太郎の4会員がテニス

歴、テニスの効用等、テニスへの熱い思いを語った。高齢化社会を迎える日本と SRID だが、私(鈴木)は彼等がいる限り日本も SRID もここしばらくは安泰だと安心している。彼等はどうしてこれほどテニスにはまってしまったのか？テニスオタクのおじさん達を紹介する。



①コロナにもかかわらず年間 13 回の試合に参加する日本テニス協会のランキングプレイヤー (山岡) ②大学時代より日米フィリピンを舞台に半世紀を超えるグローバルプレイヤー (玉置) ③テニスクラブをはしごして、誕生日には自分へのプレゼントとして 14 時間のテニスレッスンを受けるギネスブック級プレイヤー (不破) ④膝痛の治療中なれども、再開後は末永く続けることを目指すプレイヤー (松田) など。いずれもテニスの効用としてストレスや運動不足の解消のほか、プレー仲間との楽しい交流をあげている。

最後に、不破吉太郎会員が疲労回復、怪我予防、知的集中力を高める効果のあるストレッチとヘッドマッサージの方法を実演してくれた。ストレッチ：伸ばす部位に意識を集中し、腹式呼吸でゆっくり息を吐きながら伸ばす。力を入れずに腕や足などの重みを利用し、自然に伸ばす。伸ばす時間は体の声を聴きながら決める。ヘッドマッサージ：耳の周辺部、こめかみ、後頭部、首、肩、腕、手、指、胸上部から肩にかけて、目を閉じて美しい海岸などの情景を思い浮かべながら揉みほぐす。

第 8 回 SRID サロン「危機下で生きる教訓」池田明子会員

2022 年 6 月 4 日にカイロ在住の池田明子会員をスピーカーに招き、藤村幹事をホストとしてサロン「世界的な危機下での生きる教訓とエジプト生活」を開催した。池田会員は国連に 26 年間勤務しており、勤務地はニューヨーク、イラク、コートジボアール、リベリア、レバノン、イタリア、エジプトと文化的多様性に富んでいる。他方、エボラ感染症、イラク戦争、シリア内戦等の危機的状況下で勤務した経験もある。緊迫した状況下にあっても仕事と生活をバランスさせ、楽しく生きる知恵を池田会員が語った。

どんな危機的な困難なところであっても、より良い仕事をするためには心身の健康が大切で、特にメンタル面で健康でなければならない。そのためには、楽しいことを考えることが第一に重要である。いくつかの教訓となることを表に整理した。

教訓：良い仕事をするには身体とメンタルと健康でなければならない

- ▶ 楽しいことを考える (次の娯楽、旅行、買い物など)
- ▶ できる限り行ってみるやってみる・行動に移す
- ▶ 新しいレストランやお店、公園、などいってみる
- ▶ 運動をする (ゴルフなど縁が多い)
- ▶ なにか新しいことをしてみる (最近ではイランやK-ポップ曲に関心がある)
- ▶ コロナにおいては室内でできる
ヨーガ、ベリーダンス (内蔵を温める動き)、ネットフリックス (韓ドラ)

ベイルートでは経済がかなり荒廃していて、娯楽も乏しくなっていたが、ヒズボラが支配する地区に野原のゴルフ場が一つあった。ある時、日本大使と友人と 3

人でゴルフをしていた時、銃声が聞こえてきた。すぐに大使が「地面に伏せなさい！」というので、木の下の地面に10分ほど伏せていた。「もう大丈夫だろう」という大使の声でゴルフを再開したことがあったが、危険を伴う場所のゴルフだった。

カイロは歴史的な遺跡も多く、マリンスポーツ、ゴルフ、砂漠ツアーなど楽しめる場所が多いので、典型的な楽しい勤務地になっている。カイロの人口は2千万人を超えて、非常に混雑している。政府は新都市を建設し、首都を移転させる計画を進めている。そ



ギザのピラミッド群

こはカイロ郊外の車で2時間かかる砂漠にあり、東京23区の1.1倍もある大きな新都市である。国連も One UN ということで、全ての国連機関が一つの建物に入居することになっている。

観光地としてお勧めの場所はたくさんある。例えば、アスワン神殿、ルクソール(王家の谷)、ギザのピラミッド、シャルムエルシェイクの海(素晴らしいサンゴが見れる)、クジラの谷、マルサアラームの海(紅海)、シーワ砂漠のオアシスにあるシャーリー要塞、アブシンベル宮殿、カルナック寺院、シナイ半島にあるモーゼが十戒を受けた山、等々。ぜひ訪問して楽しんでもらいたい。

第9回サロンは8月下旬に大嶋清治会員が自身の「世界民族仮面プチギャラリー」の開館について紹介する予定である。